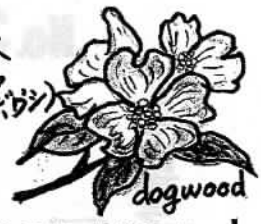
九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 **No.389**

2023（令和5）年4月1日（土）発行



■ **はらまち九条の会** は、戦争放棄の憲法９条を守り、永久に「戦争をしない国・日本」であることを願い、「鈴木安蔵の出身地の九条の会」を誇りに活動する自由な市民の会です。支持政党や宗教を問わず、何の拘束もなく、匿名でも入会できます。■結成は2005年12月。会員は南相馬市原町区を中心に364名。 ■会費は年千円。隔月で会報を発行しています。

◀本会のシール（デザイン：朝倉悠三さん） ■ご入会申し込みは事務局員へ！

主催・はらまち九条の会

2019年の開催以来ですが 「総会」と「映画会」を開催します

日時：6月18日（日）午後1時～4時（前半に総会・後半に映画会）

会場：南相馬市マルチメディアホール

（原ノ町駅前・南相馬市民情報交流センター）

映画会は

候補①中村哲医師の偉業を **『荒野に希望の灯をともす』**

アフガニスタンとパキスタンで35年にわたり、病や貧困に苦しむ人々に寄り添い続けた中村氏。戦火の中で病を治し、井戸を掘り、用水路を建設した。「彼らは殺すために空を飛び、我々は生きるために地面を掘る」と。

候補②小原浩靖監督 **『原発をとめた裁判長** そして原発をとめる農家たち』

2014年に関西電力大飯原発の運転差し止めの判決を下した福井地裁の樋口英明裁判長は、定年退職後、日本の全ての原発に共通する危険性を説く活動を始めた。

日本の3.11原発事故で、ドイツは全原発停止に踏み込み、日本は原発の再稼働や60年延長をめざす。私たち福島の原発事故被災民はどう対応すればいいのか。

※**映画①**か**②**を決定して、6月初旬に「お知らせ」と「総会資料」を郵送いたします。多くの会員さんのご出席、ご入場をお待ちしております。

主催・鈴木安蔵を讃える会

小高区出身の憲法学者鈴木安蔵は終戦直後に「憲法」の原案を起草し、それがGHQに採用され、現在の「日本国憲法」が誕生しました。

立正大学名誉教授 **金子勝先生講演会**

演題『鈴木安蔵先生をたずねて
先生の眼から世界の平和を考える』

金子 勝先生

○日時：**5月3日**（水・憲法記念日）午後2時30分～4時

○会場：小高区浮舟文化会館

★入場無料　どなたでもご入場大歓迎です！

後援：はらまち九条の会・南相馬市教育委員会・福島民報社・福島民友新聞社(申請中)

＜**講師の憲法学者金子勝先生**＞は、愛知大学大学院法学研究科で、鈴木安蔵先生（小高区出身）に師事。憲法学・政治学・社会科学論専攻。立正大学名誉教授。著書多数ですが、昨年の新刊『日本国憲法と鈴木安蔵、日本国憲法の間接的起草者の肖像』（八朔社￥1,200税）が、お薦めです。

No.389

3. 11・原発事故を忘れないために

岸田文雄政権は原発回帰へ政策を大きく転換し、私たち原発事故被災民の“原発ゼロ”の願いを無視し、原発事故から何も学んでいないかのようです。

落合恵子・高橋哲哉・青木理の「読んでほしい本」

東日本大震災・原発事故から十二年

▶3月11日付『朝日新聞』beより

「自分ごと」として

落合恵子
作家

「孤塁 双葉郡消防士たちの3・11」 吉田千亜
「歌集 青白き光」「歌集 再び還らず」 佐藤祐禎
◀「福島に生きる凛ちゃんの10年 家や学校や村もいっぱい変わったけれど」 文・写真 豊田直巳
「希望の牧場」 作・森絵都、絵・吉田尚令
「原発事故は終わっていない」 小出裕章

地元と他者の視点

高橋哲哉
東大名誉教授、哲学者

◀「孤塁 双葉郡消防士たちの3・11」 吉田千亜
「無情の神が舞い降りる」「百年の孤舟」 志賀泉
「原発禍を生きる」 佐々木孝
「フクシマ以後の思想をもとめて 日韓の原発・基地・歴史を歩く」 徐京植、韓洪九、高橋哲哉

マスメディアの役割

青木理
ジャーナリスト

「河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙」 河北新報社
「プロメテウスの罠」シリーズ 朝日新聞特別報道部
◀「ふくしま原発作業員日誌 イチエフの真実、9年間の記録」 片山夏子
「地図から消される街 3.11後の『言ってはいけない真実』」 青木美希

グラフィック・松本 佳乃

吉田千亜『孤塁』 福島第一原発が暴走するなかで、双葉郡の消防士たち125人が、死の恐怖を感じながら被災者の救出や、事故原発構内の吸水や消火活動にあたった日々を、消防士66人から聞き取りしたもの。本会会報No.343で紹介、No.350に読後感想文も掲載。

佐藤祐禎『歌集青白き光』 大熊町の農民歌人で、自ら原発作業員だった体験から反原発を短歌に詠んだ。「いつ爆ぜむ青白き光を深く秘め原子炉六基の白亜列なる」と事故を予知。いわき市に避難し、2013年83歳で死去。

絵本『希望の牧場』 浪江町で吉沢正巳さんが営んできた和牛の牧場。事故直後、国は牛の殺処分を進めるが、吉沢さんは拒否して約300頭を飼い続けた。それを絵本にしたもの。

志賀 泉『無情の神が舞い降りる』 著者は南相馬市小高区出身の太宰治賞受賞作家。原発事故直後の小高を舞台に、寝たきりの母を抱え、故郷と原発との深い絡み合いや、地元を出ていった人、残らざるをえなかった人、戻ってきた人などのそれぞれの思いを描く。

佐々木孝『原発禍を生きる』 著者は東京純心大や早稲田大で教鞭をとったスペイン思想研究家。病身の妻を伴い2002年に南相馬市原町区に転居。3.11事故後、母、孫娘ら6人で避難しないで橋本町の自宅に残り、毎日千文字のブログ「モノディアロゴス」を記し続けた。2018年12月79歳で病死。本会報No.165, 168参照。

朝日新聞社『プロメテウスの罠』 2011年10月から16年3月までの朝日新聞の連載の集録。

『ふくしま原発 作業員日誌』 東京新聞片山夏子記者が、原発事故直後から9年間取材して連載。事故の真実、現場作業員の本音を克明にあぶり出した。2020年第2回むのたけじ賞・大賞を受賞。本会会報No.343で紹介。片山記者は2020年から福島市に在住し、東京新聞福島支局長として福島から原発被災を発信中です。

青木美希『地図から消される街』 原発事故で二重三重に蹂躙され続ける相双地区。誰も責任を取らず、住民は身捨てられ、除染も欺瞞です。戻れなくしておいて、勝手に「白地地区」などと呼ぶなんて。もっと怒りましょう！